

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年11月）

回覧

15. 戦後復興期の八幡（歌手：岡晴夫、街頭テレビ）

戦前に「上海の花売娘」で人気歌手となった岡晴夫（本名：佐々木辰夫、木更津生まれ）は昭和15年に結婚して、この地に住む。戦後は、屈託のない明るさと少し鼻にかかった歌声で「東京の花売娘」「啼くな小鳩よ」「憧れのハワイ航路」など相次いで大ヒットをとばす。この地で暮らした縁で立派な顕彰碑（題字：藤山一郎）が葛飾八幡宮の社務所前に建立されている。一時期までは往年のファンの方々が碑の前に集い、岡晴夫のヒッ



ト曲を唱って慰霊されていたのを覚えている。

（左：岡晴夫のレコード。
『昭和歌謡100名曲』塩澤実信著より）

（右：葛飾八幡宮社務所前の顕彰碑）

人気者はジュリー（沢田研二）、キムタク（木村拓哉）と愛称付くが、オカッパルと親しまれ、地方巡業時の大盛況で昼夜2回の公演で入りきらず、急遽、3回めを行ったなどの逸話が残る。そのような忙しさから体調を崩し、昭和45（1970）年に54歳で没する。

「市川八幡キリスト教会」の所にお住まいだったとか、八幡一番街の「萌季屋」^{もえぎ} 辺の建物に音楽教室を持ち、練習の歌声が響いていたとか、「稲葉屋」の所に事務所があったなどと伝わる。『終戦直後の八幡』（佐藤勉著）には「花束を持ったファンの若い女性がたくさん押し掛け、鈴なりに塀にぶら下がりキャーキャー嬌声^{きやうせい}を上げた」との一節がある。

話は代わるが、古老は参道の氏子会館の前あたりに、紙芝居屋さんが来ていたことを覚えている。自転車に額縁のような舞台を積んで、絵を見せながら興味深く物語をして、次の絵に移っていく。話がクライマックスに入ったところで「続きはまた来週」となる。駄菓子^{だがし}を売ることで見料^{けんりょう}としていたと思うが、買わなくても見られた。拍子木か何かで来たことを知らせたのだと思うが記憶は曖昧である。私も含めて多くの子ども達が参集・見入ったものである。

その場所に街頭テレビ（高さ3メートルほどの櫓^{やぐら}にテレビが据えられる）が設置され、無料で観覧できた。（『市川市の昭和 写真アルバム』の77頁に遠景に街頭テレビ塔が小さく写っている昭和32年の写真が所載。後に神社境内に移設されたとの話もある）

テレビの入った箱の扉^{とびら}を開けて上映したから管理者がいたのだろう。街頭テレビは昭和28年に新橋駅、日比谷公園、浅草寺など首都圏の55か所に220台を設置された。この地の設置時期は不明だが、この時か遠くない時期であろう。大人も含めて多くの人が集まり、大相撲（栃錦・若乃花時代）、プロレスの力道山の活躍に興奮した。その後、裕福、新しモノ好きの家庭に白黒テレビが入り、その家に観に行っていた時代があった。広く家庭に普及するのは、昭和33年の皇太子御成婚の時と言われている。カラーテレビは昭和39年の東京オリンピックが契機であり、日本経済は「いざなぎ景気」と呼ばれる時代に入っていく（負の側面は公害、自然破壊）。